

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	宮沢賢治と中国に関する研究：西域童話と中国における受容を中心に
Author(s)	劉，春燕
Citation	
Issue date	2017-03-25
Type	Thesis or Dissertation
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/37844">http://hdl.handle.net/2298/37844</a>
Right	

## 論 文 要 旨

氏 名 劉 春燕

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

宮沢賢治と中国に関する研究 —西域童話と中国における受容を中心に—

論文要旨（別様に記載すること。）

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、CD等の電子媒体（1枚）を併せて提出すること。  
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

## 論文要旨：

本論文の研究テーマは「宮沢賢治と中国に関する研究」として設定される。中国の西域を舞台とした西域童話の考察、及び中国における宮沢賢治の受容形態の検討という大きく二つの問題点が含まれる。

一つ目の問題点は西域童話の考察についてである。宮沢賢治には、「西域童話」と通称される作品群が存在する。しかし、「西域童話」というのは、いつの間にか成立した仮称であり、現在でも厳密に定義されていない。また、他の作品と比べ、盛んに研究されているとも言えない。本論に取り上げられる童話「マグノリアの木」、「インドラの網」、「雁の童子」、及び「北守将軍と三人兄弟の医者」はたびたび論じられるが、西域童話を一つのテーマとしてまとめて研究することは少ないのが現状である。故に、四編の西域童話の考察を通して、西域を舞台とした作品群は宮沢賢治の作品研究においてどのように評価できるのかは重要な課題である。西域童話の研究の「切り口」は賢治の信仰した『法華経』における仏教思想や仏教要素だと考えられる。その研究の「切り口」をめぐって、本論文の第一編として三章から構成された。

第1章は、「「マグノリアの木」と「インドラの網」考」である。「マグノリアの木」と「インドラの網」は西域作品群においてプロットが簡潔で、文量も少なく、通常では童話と呼ばれているが散文に近い作品である。本章では、「マグノリアの木」と「インドラの網」二つの作品を取り上げ、賢治における仏教思想や仏教要素をめぐって考察してきた。「マグノリアの木」においては、主人公諒安や諒安と同じくらいの人との会話や自己問答の言葉を主題として、島地大等編『漢和対照妙法蓮華経』方便品第二の「諸法実相」や「十如是」の仏教思想を参照しながら分析を行った。「インドラの網」においては、島地大等編『漢和対照妙法蓮華経』見宝塔品第十一に書かれている盛大で荘厳な仏教光景を作品の創作背景として、原子朗の『新宮沢賢治語彙辞典』の解説を引用しながら、インドラの網や天鼓や蒼孔雀といった仏教要素を分析してみた。その考察によって、最も重要な結果として、両作品を支えているモチーフはそれぞれではあるが、宮沢賢治が幻想や創作の要素を取り入れ、独自の『法華経』への理解と解釈を表した作品だと考えられる。

第2章は、「雁の童子」である。本章では、「雁の童子」における作品概要、仏教出典、先行研究などをまとめ、具体的に分析しながら同時代の作品との関連性をめぐって、いくつかのエピソードにおける仏教思想や自然の法則や反戦メッセージなどを検討してみた。「雁の童子」は同時期の1923年頃の作品「インドラの網」・「学者アラムハラドの見た着物」・「ビジテリアン大祭」などとの深い関わりがあり、賢治の思想や考えに共通していると窺える。童子は様々な思想や考えを持って作品には直接に表現していない。いじめられても決して怒らないデクノボウ像でもあれば、悲しみを持つ慈悲菩薩像でもあれば、自然の法則を認識している仏でもあれば、秘める反戦メッセージを発信する平和主義者でもある。検討の結

果として、「雁の童子」は西域を舞台にした仏教の根本思想の下で、様々なメッセージが秘められている素晴らしい作品だと評価できる。

第3章は、「北守将軍と三人兄弟の医者」である。本章では、四つの改稿過程を経てから発表形となった童話「北守将軍と三人兄弟の医者」の作品概要及び先行研究をまとめた。先行研究を参考した上で、満州侵略戦争という敏感な歴史背景に発表した実態から、本作品はいかに反戦作品として展開していったのかを考察してきた。当時戦争観を書きにくい時代背景において、「北守将軍と三人兄弟の医者」は反戦作品として曖昧な表現、暗喩的な手法で表現されることが分かった。そして、「北守将軍が馬とひとつになる」、「灰いろの人間」、「北守将軍と三人兄弟医者の関係性」、「北守将軍が仙人になる」という四つの戦争を反映するテーマを中心として論じた。特に、将軍がすべての光栄や名誉を捨ててス山に身を隠し静かな生活を選んだのも当時人々の反戦・厭戦の姿勢及び平和への祈願という大きな意味を持つのである。

二つの問題点としては、宮沢賢治の中国における受容である。現在、最大の中国語検索サイト「百度」で「宮沢賢治」というキーワードで検索すると、2016年3月15日まで関連サイトが382000件、関連論文は341件となっている。これらは王敏・于长敏・周異夫・周龍梅・彭懿・楊偉などの代表的な翻訳者・研究者による努力の結果だと評価できる。そして現在、多くの中国の人々が賢治の「心象スケッチ」に魅了されていると言える。本論文では翻訳作品の受容について検討していく。その研究の「切り口」としては、中国語翻訳作品の特性である。翻訳の特性として、翻訳方法と特徴、翻訳品間の比較、語彙の考察などを行うのが独創的な検討手法である。故に、受容の研究をめぐって本論の第二編として三章にした。

第4章は、「宮沢賢治と詩誌『銅鑼』」である。『銅鑼』は1925年4月に中国広州嶺南大学で日本人留学生の草野心平が日本詩人の原理充雄、富田彰及び中国詩人黄瀛、劉燧元（思慕）を同人として招き創刊した詩誌である。1928年6月までに合計16号が発行された。賢治は1925年第4号からの同人参加以来、1928年第13号まで9回寄稿した。『銅鑼』はわずか三年の歴史であったが、誕生地の中国広州、中日両国の同人の創刊という事実は、日本現代主義詩歌が中国と深い関連があり、国境を越えて時代を刻む歴史的な意義があると言える。『銅鑼』誕生の決定要因は草野心平と黄瀛など新詩人との付き合い、交流から促されたものであるが、広州時代『春と修羅』との最初の接触は宮沢賢治の同人加入、詩作の掲載に伏線を張った。後の賢治と黄瀛の親交促進、中国における賢治作品の伝播受容にも大きな舞台を提供した。『銅鑼』という詩歌雑誌は賢治と中国に関する研究において極めて重要な存在に違いない。本章では、宮沢賢治と詩誌『銅鑼』をテーマとして、詩誌『銅鑼』の歴史概観、先行研究をまとめてきた。その参考にに基づき、『銅鑼』に寄稿した13篇の詩作品を分析した上で、該当刊号の特色や傾向、及び掲載されたほかの同人詩との比較と関連性を検討してみた。この考察によって、宮沢賢治と同人黄瀛の歴史的な関係、『銅鑼』の特色・性格及び時代意義を概括した。また、『銅鑼』への9回の発表及び13篇の寄稿は、賢治の生

前の発表活動の中で、一つの雑誌への発表数と時期的にいても、最も多く長かったのである。そういう意味で、『銅鑼』は賢治研究の詩史にも重要な詩誌と言える。なお、『銅鑼』詩人活動から農村活動への転向から、『銅鑼』が賢治生前に詩人としての過渡的な時期を代表する詩誌とも言える。

第5章は、「雨ニモマケズ」と「北国農謡」である。「雨ニモマケズ」は1941年4月に北京近代科学図書館出版の、翻訳家の銭稻孫によりタイトル「北国農謡」に翻訳し初めて中国に紹介された。現在の中国において、もっとも読まれている賢治詩である。なお、様々な訳が出ているが、銭稻孫訳「北国農謡」の完成度はもっとも高いとも言われている。しかし、日本支配下の植民地である北京に、当時の日僞と呼ばれた銭稻孫が訳したといった複雑で敏感な戦争時代の背景として、あまり評価されていなかったようである。最近、中国人の研究者鄒双双は文化交渉史という視座から銭稻孫の日本との関わりやその業績を見直し、改めて翻訳家とした実績や貢献を肯定し、新たにその生涯を評価することになった。本章では、鄒双双の論を参考しつつ、「雨ニモマケズ」と訳詩「北国農謡」をめぐって、翻訳家銭稻孫の紹介、北京近代科学図書館の事情、銭稻孫と宮沢賢治の接点、『日本詩歌選』の掲載事情などを考察した上で、原歌「雨ニモマケズ」を対照しながら訳詩「北国農謡」に見られる銭稻孫の翻訳の特徴を検討してみた。訳詩は中国古典の体裁である「四言・三言・七言」形式が混在され、まさに北国を描く古詩風の農謡だと言える。また、原詩にはない思想や表現や要素が取り入れられ、作者の意思がより鮮明に描き出され、読者に伝わっていくのである。苦しい農作業を味わいながらも、悠々と田園生活を楽んでいる「苦中作楽」の心境が溢れている。困った人々に足を運んで助けにゆき、凶作に苦悩し訴える姿が人々に感動を与える。まさに、「北国農謡」は銭稻孫のアレンジによって完成度が高く、中国版の古文調農謡だと評価の結果を得たのである。「北国農謡」が中国における初めの翻訳作品として、その考察から中国における賢治作品の翻訳問題においても重要な意味を持つのであろう。

第6章では、詩「春と修羅」の二つの中国語翻訳——呉菲訳と林少華訳をめぐり、それぞれの翻訳における文章の特徴や語彙解釈の相違を考察した。呉菲訳の『春と修羅』は原詩のリズム感を維持するために直訳を採用したが、林少華訳は原詩に従わず日本文学の感覚で意識を選んだのである。また、訳者の理解により注釈をつけた語彙もそれぞれである。しかし、詩への解釈や語彙の説明はまだ十分ではないため、読者には十分な理解が至っていないと思われる。これらの問題は今後の宮沢賢治の詩の翻訳においても大きな課題となるだろう。詩のタイトル「春と修羅」には、希望をもたらす春と苦しい修羅が並べられているのは鮮明なコントラストと成る。明るい春と暗い修羅は光と影を代表する。本章では、「春と修羅」中国語の随筆の「我独行修羅，玉髓云流溢，春鳥啼何处？」（おれはひとりの修羅なのだ／（玉髓の雲がながれて／どこで啼くその春の鳥））から「修羅」「雲」「春の鳥」三つの風物をめぐって検討してきた。元来の修羅は暗い印象だが、春を告げる希望の雲と春の光景を生き生きとさせる春の鳥の鳴き声と融合してから、希望と夢を抱く修羅へ変身したのである。それで、「春と修羅」は震災後の日本に修羅の希望と夢を与えたと言ってもよいで

あろう。

以上、宮沢賢治と中国に関する研究を、二つの大きなテーマから検討した要旨である。その検討の意義をまとめれば、以下の二点を提示できよう。

まず、宮沢賢治と西域作品群との関係についてである。中国文学・文化は宮沢賢治における西域作品群の創作の源泉のひとつである。そして、西域を舞台とし、生涯信仰した『法華経』と中国の思想や要素を西域作品群に取り入れることも賢治作品の一つの特徴と魅力である。宮沢賢治が中国の西域を舞台として執筆した作品は童話・短編・詩に分類されている。本論文に取り上げた四編の西域作品はその一部分に過ぎない。今後、他の西域作品の研究にも役に立てればよいであろう。

それから、賢治の中国における受容についてである。近年、中日の学術交流やインターネットの普及により、中国における宮沢賢治の伝播や軌跡を整理し遡ることが出来るようになった。戦前、宮沢賢治の詩集『春と修羅』が海を渡って草野心平より中国の文人たちに紹介されたが、中国語の翻訳品がまだ生じていない。故に、歴史から見ると、翻訳作品の伝播段階は主に戦中と中国の特殊な歴史段階「文化大革命」後の現代編に分かれている。戦時中、「雨ニモマケズ」（「北国農謡」）、「風の又三郎」（「風大哥」）、「注文の多い料理店」（「足件繁多的館子」）が当時の日本植民地満州・北京・上海に受容された。わずかの三つの作品であるが、中国における翻訳品の受容としては、大きな歴史的意味を持つのである。戦後、1980年に王敏は初めて「注文の多い料理店」を《花样翻新的饭店》に訳し新中国に紹介して以来、中国における宮沢賢治の受容が広く展開された。「銀河鉄道の夜」と「風の又三郎」をタイトルとした翻訳作品集も多く出版された。

本論文の宮沢賢治と中国で創刊した詩誌『銅鑼』の検討は、中国に関する研究においては重要な1頁となり、中国語翻訳品の研究の発展を促したと言える。一方、「雨ニモマケズ」の翻訳「北国農謡」及び詩「春と修羅」の翻訳《春天与阿修罗》の考察は宮沢賢治作品の翻訳受容研究の開始となる。今後の中国における受容研究に参考となり、まとめた資料からより幅広く研究できるように願って本稿を閉じたい。